

「ビオトープ池の維持管理研修会」報告書

概要

- ・ 日時：2013（平成 25）年 8 月 25 日（日）10：00～15：00
- ・ 場所：いわてクリーンセンター ビオトープ池および研修室
岩手県奥州市江刺区岩谷堂字大沢田 113
- ・ タイムスケジュール
 - 10:00 集合 いわてクリーンセンター
 - 10:15 ビオトープ池移動
いわてクリーンセンター ビオトープ池の解説
維持管理作業の説明及びその後の作業
ビオトープ池内の水生昆虫の採取
 - 12:15 作業終了、研修室移動
 - 12:30 昼食
 - 13:30 水生昆虫の観察・解説
 - 14:00 作業内容のふりかえり・意見交換
 - 15:00 終了
- ・ 会費：1,000 円（昼食、研修会資料含む）
- ・ 主催：NPO 法人 日本ビオトープ協会 北海道・東北地区委員会
- ・ 参加者 20 名

研修会の様子



ビオトープ池の説明



作業前の池の様子



作業の様子 1



作業の様子 2



作業の様子3



作業後の池の様子



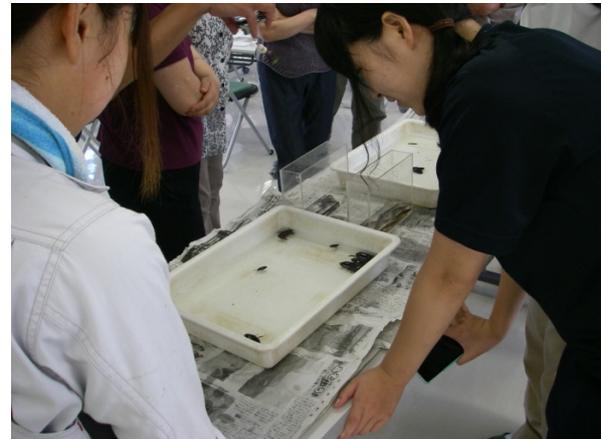
集合写真



採取した水生生物



水生生物の観察1



水生生物の観察2



作業内容の振り返り



意見交換の様子

意見交換会の概要

- ・ ビオトープは、動植物の保全や新たな自然環境を作るためなど、目的をもって作ることが大切である。
- ・ 普段あまり見ることのできないゲンゴロウ、ヒメビシ等の希少動植物をまじかに見ることができ、貴重な体験になった。
- ・ もともとは、人間活動によって絶滅の危機に瀕している動植物が増えた。そういった状況の中で、今回のように希少となった動植物を人間の手で保全していくことは当たり前のことなのだろうか？
- ・ ビオトープはそもそも維持管理が難しいため、学校ビオトープでも断念するところは多い。小学校等、学校で作られているビオトープでは、担当する教師によって生き物などに対する興味や、ビオトープを維持・管理することへの熱意に差があるため、転勤などによって熱意のあった教師がいなくなってしまうことが原因として考えられる。
→そのため、学校、生徒、父兄、地元住民等が継続して維持管理していく仕組みを作ることが重要となる。
- ・ 都会で暮らす子供たちと田舎で暮らす子供たちでは、自然に対する考え方が違う。都会で暮らす子供たちは自然に対して抵抗があり、虫を触れない子も多い。先生が苦手という場合も少なくない。
- ・ 若者はもっと自然に興味を持つべきである。興味を持たなくても生きていける環境・社会になってしまっているのが現状である。
- ・ 大学の授業でビオトープは大切といいつつも、言葉だけではその重要性や現状は理解しにくい。実際に、現場に出て活動する先生は少ない。
- ・ 学校の先生は、できる子に足並みを揃えて授業を進めるため、苦手な子は置いていかれる場合が多い。これでは、興味を持たせること自体が難しい。また先生が消極的で、子供たちが自然に興味を持っても、思うようには行動できないことがある。
- ・ 昔は、生徒が先生よりも昆虫などに詳しい場合があって、その関係が成り立っていた。しかし、現在では先生が生徒よりも知識が豊富でなくてはならないと考える先生が増えたせいか、ビオトープが維持しきれないのでは。
- ・ 最近では企業においてもCSRの一環として、植林活動や事業場内の緑地の保全活動、ビオトープ作りも行われている。ただ、東北は周辺に自然が多いので、首都圏や西の地方に比べると、意識は低い。
- ・ ビオトープを作成するにあたって、移植する植物の種類を考慮するべきなのか。たとえば、ビオトープにクレソンを移植することによって何らかの影響は出るのか。
→ビオトープとは、ドイツ語で bio(生き物)をあらわす言葉から来ているが、ビオという言葉は、生物だけでなく、その環境全体という意味が含まれている。つまり、貴重な生き物が重要なのではなく、貴重な生き物が住む環境が貴重という考えがビオトープの根本となるため、クレソンのような外来種を移植することは好ましくない。
- ・ 作業の詳細がわからず参加したが、楽しかった。
- ・ ビオトープはあまり手を加える必要がないと思っていたが、実際には定期的な維持管理が必要であるとわかった。
- ・ ビオトープに繁殖した在来種のヨシなどを今回除草したが、これは良いことなのか？
→このビオトープはヒメビシやミツガシワといった水生の植物の保全が目的であるためにヨシ等の除草を行なっている。また、ビオトープの半分は手を入れずに自然にま

かせている。

- ビオトープを作る際には、自然の仕組みをよく理解し、その先どうなるかをよく考えてから、工事をするべきだと感じた。
→ただ、現場ではいろいろな問題（時として予想していなかったこと）も起こるので、その場で臨機応変な対応も必要となる。
- 人間には、生き物にとってどれが一番良い環境なのかは分からない。だからこそ、生き物好きが見て楽しいと思える空間を作ることが重要なのだと思う。結果、それが生き物にとっても住みやすい環境となるのかもしれない。